

花巻市 博物館

目次／P1 巻頭あいさつ／P2-3 共同企画展「斎藤宗次郎」／
P4-5 テーマ展「台焼」・「花巻人形」／P6 活動レポート・新任
学芸調査員紹介／P7 館長コラム・行事予定・インフォメーショ
ン／P8 花博コレクション



だより

2018.12
No. 56



大正 10 年頃 斎藤宗次郎・仁志夫妻（前列）と求康堂従業員〔写真／当館蔵〕

平成30年度花巻市共同企画展 ぐるっと花巻・再発見！～イーハトーブの先人たち～

「斎藤宗次郎 ―花巻時代の足跡―」

2018年12月8日(土)～2019年1月27日(日)

明治33年12月12日、雪が降り積もる花巻川口町の豊沢川のほとりで洗礼を受けた一人の青年がいました。
彼の名前は斎藤宗次郎。無教会主義を提唱した内村鑑三の最も忠実なる弟子となり、その生涯をキリスト
信仰に捧げた人物です。

本展では、キリスト教がまだ一般的ではなかった花巻において、信念を曲げることなく信仰を貫いた宗次郎
の花巻時代の足跡を辿ります。

平成30年度花巻市共同企画展 ぐるっと花巻・再発見！～イーハトーブの先人たち～

齋藤宗次郎－花巻時代の足跡－

期間：平成30年12月8日(土)～平成31年1月27日(日)

■はじめに

齋藤宗次郎^{さいとうそうじろう}は、明治・大正時代の、まだキリスト教がそれほど浸透していなかった花巻で、内村鑑三^{うちむらかんざう}の弟子となり、キリスト教徒としての生き方を貫いた人物です。

宗次郎は、その生涯に渡って膨大な量の日記を残しました。さらに晩年にはその日記を元にした「二荊自叙伝」^{にけいじじょでん}も執筆しています。

■齋藤宗次郎の生い立ち

宗次郎は、明治10（1877）年2月20日に東和賀郡笹間村（現花巻市北笹間）にある曹洞宗東光寺^{とうこうじ}の住職・轟木東林^{とどろきとうりん}の三男として誕生しました。高等小学校時代に実母の甥にあたる齋藤武次郎^{ぶじろう}の養子となり、齋藤姓になります。



↑ 生家東光寺（明治・大正期）



齋藤宗次郎（大正12年）→

■生涯の師 内村鑑三との出会い

笹間尋常小学校の分教場を経て稗貫^{ひえぬき}高等小学校へと進学した宗次郎少年は、高等小学校4年の修身の時間にキリスト教徒内村鑑三が起こした“勅語不敬事件”について知り、幼い頃より養われてきた愛国心から激しい怒りを覚えました。これが内村鑑三の名前を初めて知る契機となった出来事でした。内村鑑三を心から憎んでいた宗次郎でしたが、岩手県尋

常師範学校3年級の時に運命の1冊と出会います。それが内村鑑三著『地理学考』^{ちりがくこう}（のちに『地人論』^{ちじんろん}と改題）でした。これ以降、内村著作の愛読者となった宗次郎は内村の思想に傾倒していき、遂には生涯の師と仰ぐようになりました。明治31年に岩手県尋常師範学校を卒業した宗次郎は里川口尋常小学校の教員となります。



← 内村鑑三と
花巻教友会一同
（明治43年）



苺畑の宗次郎と内村鑑三
（大正後期）→

■キリスト教入信と迫害

宗次郎は、明治33年に洗礼を受け、内村と同じキリスト教徒となりました。キリスト教入信後の宗次郎は、教室でも生徒たちにその教えについて説くようになりました。しかし、勅語不敬事件のあおりを受け、近代キリスト教は冬の時代をむかえていました。宗次郎もまた、様々な迫害を受けることになります。道を行けば石を投げつけられ、「耶蘇^{やそ}（キリスト教を揶揄する言葉）」や「露探^{ろたん}（ロシアのスパイ）」などと罵られ、身に覚えのないような悪口を流布されました。さらには、天職と信じていた小学校教員の職も追われることになります。

■宗次郎と家族

宗次郎は師範学校卒業を目前に控えた明治31年1月に最初の妻スエと結婚しました。スエとの間に2人の娘（愛子^{あいこ}・多祈^{たき}）をもうけています。スエや

2人の娘たちも宗次郎の影響からキリスト教を信仰し、家族で頻繁に祈禱会や聖書の朗読などを行っていたようです。

穏やかに暮らしていた宗次郎一家でしたが、明治42年に長女の愛子が弱冠8歳で天逝します。学校において、「耶蘇の子」とお腹を強く押されて腹膜炎を起こしたことが原因でした。さらに、その3年後には妻スエも病気で失います。妻と娘を失った宗次郎でしたが、この試練を与えた神に感謝し、信仰を深めていきました。幼い次女・多祈を抱えた宗次郎は大正2（1913）年に高知県のキリスト教徒である女性と再婚します。これが2番目の妻・^{ひとし}仁志です。仁志も先妻スエと同じように宗次郎を支え、家庭を守りました。



←愛子を抱くスエ（明治34年頃）



↑仁志・多祈・宗次郎（大正6年）

■求康堂開業と花巻の人々

教職を辞することとなった宗次郎は、明治38年に書籍取次・学用品販売店「^{きゆうこうどう}求康堂」を開業します。さらに4年後の明治42年には学用品販売の代わりに新聞取次業を開始し、新聞配達や集金に追われる忙しい日々を過ごしました。また、求康園と名付けた畑での^{いちご}苺栽培にも力を注ぎます。宗次郎の苺は大変好評で、内村鑑三からも絶賛されるほどの出来栄であったといえます。宗次郎は求康堂での業務の合間を縫って畑仕事に精を出し、また町や学校からの依頼によって花巻駅前や高等女学校の花壇作りなども行いました。当時の宗次郎の日記からは花巻農学校の教員で詩人でもあった^{みやざわけんじ}宮沢賢治やかつての教員仲間^{てるいまみじ}で信仰の友となった照井真臣乳らとの交流の様子も窺うことができます。キリスト教徒として迫害を受けていた宗次郎でしたが、真面目に働く姿などから徐々に花巻の町の人々からも受け入れられ

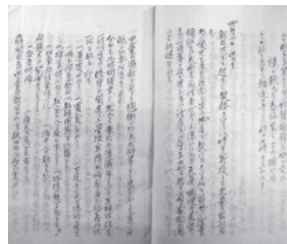
ていきました。大正15年、東京に宅地を求め、内村鑑三に仕えるための東京永住を決意した宗次郎ですが、その旅立ちの日には、大勢の人たちが駅まで見送りに駆けつけ、別れを惜しみました。

■「斎藤宗次郎資料」の寄贈

近年、宗次郎の子孫にあたる方々より、宗次郎によって書かれた明治31年から昭和43（1968）年まで約70年間にわたる膨大な日記、書簡、写真アルバム類を中心とした資料が当館に寄贈されました。これらの資料は明治・大正期の花巻の様子や宮沢賢治をはじめとする人々との交流の様子を知ることのできる貴重な資料です。

今回の展覧会では、寄贈していただいた資料を通して斎藤宗次郎という人物を多くの方々に知っていただくとともに、日記などの資料から窺うことのできる宗次郎や当時の花巻の様子をご紹介します。

（学芸員 小田島智恵）



↑宗次郎の日記
（明治31年4月2日）



↑宗次郎の描いた巖島神社の鳥居（明治30年代）

※写真・掲載資料はすべて当館所蔵

■関連イベント

▽記念講演会（聴講無料、申込不要）

「祖父宗次郎の思い出～3つのキーワード～」

講師：児玉 実英 氏（同志社女子大学名誉教授）

日時：12月8日（土）13:30～15:00

場所：花巻市博物館 講座体験学習室

▽クリスマスコンサート（無料）

日時：12月23日（日）13:30～

場所：花巻市博物館 エントランスホール

*そのほか花巻市内の共同企画展開催施設にてスタンプリヤやバスツアーを実施します。こちらにつきまして、詳しくは市生涯学習課へお問い合わせください。（☎0198-24-2111、内線418）

台焼 ― 受け継がれた業

期間：平成31年2月16日(土)～5月6日(月・祝)

江戸時代後期から幕末にかけて、庶民文化の発展に伴い、庶民にも陶磁器が普及するようになりました。花巻でも早くから陶器窯が開かれ、味わい豊かな製品が作られました。

花巻の湯本、湯口地区は良質な陶土の産地として知られており、盛岡の御用窯に原材料を供給していました。明治になってからも、地元の陶土を使った製品が焼かれ、この伝統は現在にまで受け継がれています。

今回の展覧会では、花巻の焼物を代表する台焼に焦点をあて、受け継がれた業から生まれた、陶磁器の魅力に迫ります。

台焼は、^{すぎむらかん}杉村勘兵衛が、かつて台温泉で焼かれていた湯ノ沢焼（小瀬川焼）の窯跡を利用し、明治41(1908)年から焼物や耐火煉瓦の製造に着手したことにはじまります。地場産業の振興に熱心であった当時の岩手県知事^{かさ い しんいち}笠井信一（在職 1907～1913）の^{あつせん}斡旋で、岐阜の陶工^{かわかみじゅんぞう}川上準蔵が招かれ技術指導を行なうとともに、明治43(1910)年に台陶器株式会社が組織されました。



台焼陶器工場前にて撮影【明治45（1912）年2月27日】

初期の製品は磁器で、絵付けは手描きのほか、^{かたがみ}「型紙吹き墨法」や^{ずみ}「摺り絵付け」（別名^す印判手）という当時最新の技法を採用した焼物でしたが、陶石の純度が低く濁りを帯びた半磁器のものが多かった



平和祈念東京博覧会に出品された染付蓋付菓子器

といします。

大正元（1912）年、京都・瀬戸で修業した子ども達が帰郷し、さらに研究を進めた結果、優れた白磁染付が生産されるようになりました。会社経営の失敗など辛苦した時代もありましたが、研究と工夫を進めた結果、大正11（1922）年に行われた、平和祈念東京博覧会に出品された染付は、上位入賞を果たしました。

太平洋戦争の後、県の窯業試験場があった花巻温泉隣接の地に本拠を移し、登り窯とガス窯を使い白磁染め付けのほか、青磁、辰砂、陶器を製作しています。



辰砂釉花入

澄んだ白磁の染付、そして、それを受け継いだ次世代が、時代を経て変化させた、台焼の作風をご覧いただければと思います。

（学芸員 小原 伸博）

■関連事業

▽ギャラリートーク

3月9日（土）13時30分～

▽陶芸を体験しよう

講師：五代目台焼窯元 杉村 峰秀 氏

日時：3月21日（木・祝）13時30分～15時

材料費：1,500円

平成30年度テーマ展

花巻人形

— 菊池コレクションを中心に —

期間：平成31年2月16日(土)～5月6日(月・祝)

花巻人形は、岩手県花巻で、江戸時代後期から約200年間にわたり作り続けられてきた土人形です。京都の伏見人形と仙台の堤人形の流れを汲み、独自に発展しました。

当館では、現在約3,500点、577種類以上の花巻人形を所蔵しており、多くの花巻人形ファンのおかげで、毎年その数は増え続けています。



収集した花巻人形の一部

今回の展覧会では、菊池コレクションを中心に紹介します。菊池氏は全国的に人気がある花巻人形を、少しでも多く地元花巻へ戻し、多くの方々に鑑賞していただきたいという想いで収集したといえます。

その中から1点だけここで紹介したいと思います。

だるま 【達磨】

達磨の名前は、達磨大師に由来します。達磨大師は中国禅宗の祖と言われています。

江戸時代には、達磨の赤色からほうそう抱瘡除けの意味も加わり、子どもの玩具としても普及しました。

現在でも祈願達成などの際には、達磨に目を入れる光景がよく見られます。信仰の対象としてだけでなく、決意表明の証としても広く親しまれています。

右の達磨のお腹あたりには、ダルマ筆が加えられています。“達磨”と“ダルマ筆”の組み合わせがユニークで、珍しい花巻人形です。

このように、珍しい花巻人形もコレクションされているので、少し趣向を変えて、一人のコレクターに焦点を当ててみようと思います。

花巻人形に魅了され、長年にわたり収集し、大事にされてきた花巻人形をぜひご鑑賞ください。

(学芸員 小原伸博)



花巻人形 達磨

■関連事業

▽ギャラリートーク

日 時：2月23日(土) 13時30分～

▽篠笛山口流演奏会

日 時：3月3日(日) 10時～14時30分

▽館長講座-3「歴史資料としての花巻人形」

日 時：3月16日(土) 13時30分～

演奏者：篠笛 山口流家元 山口 千壽 氏ほか

▽人形絵付け体験

日 時：3月24日(日) 13時30分～

▽ぬりえ

花巻人形のおすわり、イノシシ、福助のぬりえ

※日程等変更になる場合があります

活動レポート

ワークショップ「ミニチュア土器づくり」

当館では、11月18日（日）まで開催したテーマ展「花巻の遺跡」の関連イベントとして、小さな縄文土器を作るワークショップを実施しました。

ワークショップでは、初めに展示室の縄文土器を観察しながら、制作する土器のイメージを膨らませてもらいました。その後、縄文土器の作り方を説明し、土器作りを行いました。土器作りでは、オーブンで焼くことができる陶土を材料に土器の形を作り、縄文や竹串などで文様をつけました。

完成した土器は当館で1週間程度乾燥させた後、オーブンで焼成して、後日、参加者にお渡ししました。



形ができたよ！



お母さんと一緒に



焼成した土器。色々な形を作れます



真剣な表情の参加者

参加者からは、「本物の縄文土器のように作るのは大変難しいことが体験してはじめて分かった」や「縄文人の技術の高さに驚いた」などの感想が寄せられました。当館では、縄文土器を作るワークショップは初めての試みでしたが、参加者は皆さん、出来上がったオリジナルの縄文土器に満足していただけたようで、子供から大人まで誰でも楽しむことができるかと好評でした。今後も当館の体験学習のメニューの一つとして継続していきたいと思います。

（学芸員 高橋静歩）

新任学芸調査員のご紹介

【松橋香澄（まつはしかすみ）】

8月から学芸調査員として博物館に勤務することになりました、松橋香澄と申します。各種体験教室や、出前授業などを通して、博物館での

学びの楽しさを感じて頂けるよう頑張ります。どうぞよろしくお願い致します。

館長 コラム

花巻の遺跡

平成 30 年のテーマ展「花巻の遺跡」は、9 月から 11 月に開催された。花巻市内には、旧石器時代をはじめとして 1 千か所の遺跡が確認されている。今回の展示会では、市内の代表的な遺跡の遺構や遺物を紹介し、地域の新たな魅力を発見する機会にしたいと願い企画されたものである。

プロローグ『遺跡は歴史の宝箱』で紹介されているのが胡四王山遺跡である。胡四王山遺跡は、平安時代の集落と中世の館跡の複合遺跡であり、花巻の遺跡発掘調査の先駆けとなった遺跡でもある。最初の発掘調査は、1957 年に東京大学東洋文化財研究所が発掘調査を行い、約半世紀後の 2008 年に花巻市博物館でも調査を実施している。

胡四王山遺跡の頂部には、蘇民祭でよく知られる胡四王神社が鎮座する。胡四王神社の胡は、胡椒、胡麻、胡瓜、胡桃、胡弓等と同じ字が使われており、北方や西方の民族に由来する字が当てられている。胡四王の他に越

王、古志王、小姓等の字が使われる神社や御堂は、北陸や出羽地方に多く分布し、岩手県内でも四か所確認されている。これらの神社は、北向きの社殿を持つ特異な神社である。

花巻の遺跡の展示は、1 章旧石器時代『花巻における歴史の幕開け』から 7 章安土桃山～江戸時代『盛岡藩領花巻の時代へ』で構成されている。2 章の縄文時代では、草創期から晩期までの各時期の土器や石器や土偶、3 章弥生時代、4 章古墳から奈良時代、5 章平安時代、6 章鎌倉～戦国時代と各時代の代表的な遺跡と遺物が紹介されている。

現花巻市は、平成 18 年 1 月 1 日に花巻市、大迫町、石鳥谷町、東和町が合併して誕生している。今回の展示全体を見渡すと合併前のそれぞれの地域の特徴を読み取ることが出来る。また、合併によって各時代の遺構遺物を網羅する資料を紹介することが出来たともいえる。

エピローグ『過去と未来をつなぐために』の最後に「皆さんの足元から新たな歴史が明らかになるかもしれません。」と記されているが、旧市町の特徴を見ながら新花巻市の歴史を遺跡を通して俯瞰できる展示会となった。

（館長 高橋信雄）

行事予定

平成 31 年 3 月
平成 30 年 12 月

企画展示室

●花巻市共同企画展

「斎藤宗次郎 - 花巻時代の足跡 - 」

会 期：12月8日(土)～翌1月27日(日)

◇記念講演会（聴講無料、申込不要）

テーマ：「祖父宗次郎の思い出

～3つのキーワード～」

講 師：児玉 実英 氏（同志社女子大学名誉教授）

日 時：12月8日(土)13：30～15：00

場 所：花巻市博物館 講座体験学習室

◇クリスマスコンサート(無料)

日 時：12月23日(日)13：30～

場 所：花巻市博物館 エントランスホール

●テーマ展「台焼 - 受け継がれた業」

会 期：2月16日(土)～5月6日(月・祝)

●テーマ展「花巻人形

- 菊池コレクションを中心に」

会 期：2月16日(土)～5月6日(月・祝)

※各テーマ展のイベントはP2～3をご覧ください。

【講座】

12月 9日(日)	はじめての古文書④
12月16日(日)	はじめての古文書⑤
3月16日(土)	館長講座-3 (歴史資料としての花巻人形)

【体験学習】

3月21日(木・祝)	陶芸を体験しよう
3月24日(日)	人形絵付け体験

※内容に変更がある場合があります。

※時間は全て13:30～15:00

講座・体験学習

花巻市博物館

〒025-0014 岩手県花巻市高松 26-8-1

電話：0198-32-1030 FAX:0198-32-1050

開館時間：午前8時30分から午後4時30分まで

休館日：12月28日から1月1日まで

入館料	小学生・中学生	150(100)円
	高校生・学 生	250(200)円
	一 般	350(300)円

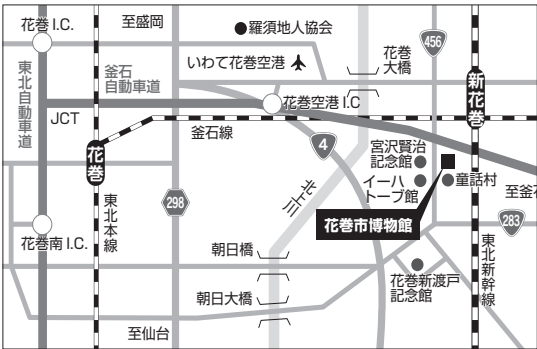
※（ ）内は 20 名以上の団体割引料金

※割安な近隣 4 館共通券もあります。

※特別展示を行う場合、入館料を定める場合があります。

交通案内

- 東北新幹線
新花巻駅より車で3分
- 東北本線
花巻駅より車で約15分
- 釜石自動車道
花巻空港 I.C.より車で約5分
- バス
新花巻駅より約5分
岩手県交通 土沢線
イトーヨーカドー行
賢治記念館口下車



◇ URL <http://www.city.hanamaki.iwate.jp/bunkasports/501/hanamakisihakubutukan/>

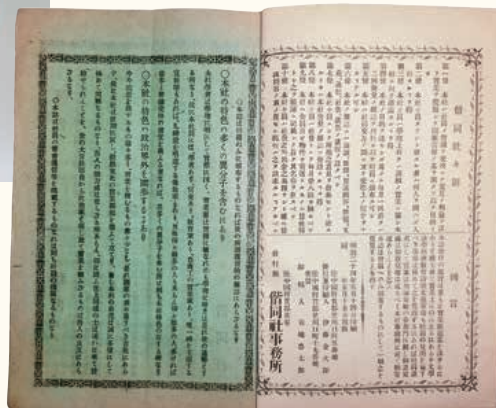
花◆博 コレクション

Hanahaku collection



↑『偕同雑誌』
(22.5 × 12.5cm、偕同社事務所発行)

『偕同雑誌』第4号「偕同社々則」→



『^{かいどうざっし}偕同雑誌』は明治24年（1891）2月から25年8月の1年半ほどの間に16冊を発行した同人雑誌です。編集人は^{きくちちゅうたろう}菊池 忠 太郎（12号までは菊地姓を使用）、発行人は^{いとうきんじろう}伊藤金次郎でした。第1号では、^{なすかわたざん}花巻の儒者・名須川他山が序文を記しています。

菊池は^{けいおうぎじゅく}慶應義塾に学び、恩師の^{ふくざわ ゆきち}福沢諭吉の言に従い郷里に戻って福沢塾の精神を受け継ぎ広めることとしました。福沢の説いた精神の中には「^{はんがくはんきょう}半学半教」があります。江戸時代から明治時代の教育機関ではよく使われた言葉で、互いに教え学ぶことを示しますが、この『偕同雑誌』は、この精神をよくあらわした雑誌といえるでしょう。社則の第一条には偕同社の目的として「社員ノ智識ヲ交換シテ交互ノ利益ヲ謀リ、実業ヲ奨励シテ国家富強ノ基ヲ開ク」とあります。様々な分野における、^{がくさい}学際的ともいえる文化交流は当時としても画期的なものでした。北海道大学総長をつとめた^さ佐藤昌介の「^{とうしやうすけ}小作農業」や、^{にとべいなぞう}新渡戸稲造の「日米交際史」など、最高レベルの学問を身に着けた人々の論説だけでなく、身近な問題に関する記述や郷土史にかかわる記事も掲載されています。趣旨に賛同する偕同社の会員は地元の花巻、岩手だけでなく全国に広まっていきました。

時に日本は立憲国家としての歩みを始めていました。『偕同雑誌』では、他国との立憲国家としての年数比較を掲載するなど、最新の情報を共有しました。また、実業面で近代化の動きに遅れを取っていたのは農業でした。『偕同雑誌』では、特にこの農業や養蚕に関する記事を充実させ、郷里の発展に尽くしたのです。

なお、編集人の菊池忠太郎は雑誌編集だけでなく、政治家、実業家としても手腕を発揮し、花巻電灯株式会社を創立するなど、花巻の近代化に大きな役割を果たしました。

（学芸員 小田桐睦弥）